

ソーシャルワークにおける尊厳概念をめぐって

大阪府立大学
人間社会システム科学研究科
児島亜紀子

本報告の要約

- ソーシャルワークにおいて、尊厳は基本的にカント的なテーマ。
- ワーカーとクライエントの関係性が『尊厳ある支援』を決定づけるという考えがSWの底流にある。
- なぜ尊厳を守る必要があるのかということについてはSWは（おそらく）疑問を持たない。
- しかし、尊厳概念を「つねに」支持して実践を開拓してきたはずのSWが、優生学または優生思想の影響を受けていた、現在もその名残があるとの指摘もある。

ソーシャルワーク関係と尊厳について

- 2006年に実施された、英国のDignity in Careプロジェクトでの世論調査の結果から、尊厳について10個の主要な要素があることが導かれた (Payne 2011: 194)
- 尊厳とは何かを明らかにすること
- クレームをいえるようなシステムを、より使い勝手のよい利用しやすいものにすること
- ケアされる人びとのニーズや好みを発見し、彼/彼女たちを個人として扱うこと。子どもに話しかけるように応じてはならない。その人たちはずべての面で助けが必要としているわけではない。

- プライバシーに配慮すること
- 食事介助をすること
- 排泄介助の権利を保障すること
- 子どもに対してするような語りかけは高齢者に対して不適切である。支援者はそうした行為をせぬよう、適切に対応すること
- ケアされる人びとが見苦しくない外観を維持するのを支援すること
- 刺激があつて目的意識が持てるような活動を提供すること
- 苦情を申し立てる際に、ケアされる人びとの代わりにアドボカシーが利用できるようにすること

→ここから、利用者の尊厳を維持するためには、**支援者（ソーシャルワーカーであれケアワーカーであれ）**がどうふるまうかが決め手になるという、しごく当然のことが確認される。

ソーシャルワークと優生学

- Welshman, J. (1999) 'The Social History of Social Work: The Issue of the 'Problem Family', 1940-70'
- いわゆる「問題（ある）家族」(problem family)をめぐる英国の優生学協会の見解と、専門職者の態度を考察した論文

→ひとことで言えば、優生学協会が著した「問題家族」に対するリポートに対して公衆衛生の医師たちは好意的な態度を取ったが、SWたちはそうではなかった、というもの。

- そもそも1929年に提出されたWood報告の中に「社会問題群」という概念が提示され、それは社会の底辺10%を構成する人びとのことだと述べられていたのに、優生学協会が関心を示したのが発端とされる。
- 時は下って1943年、「社会福祉における女性グループ」によるOur Town報告に、「問題家族」に対する言及が登場する。すなわち、「精神的、肉体的欠陥を抱え、子どもをネグレクトして裁判所に出入りし、コミュニティに迷惑をかけ、犯罪と貧困の最先端にいる人たち」がたくさんいる、と (Welshman 1999: 460)。

- この報告は、かつての「社会問題群」概念に魅了されていた人びとの心を捉えた。
- わけても、公衆衛生の医師たち。
- 医師らは、「問題家族」は「家庭の状態が不潔」で、「子どもの世話が不十分」であると指摘した(ibid. : 465)。【→このことは、家族の精神障害と結びつけて捉えられたようだ。】
- 当時の保健省は、かかる医師らの言葉に大きく影響され、断種と隔離によって「問題家族」を改善できるのではと考えた(ibid. : 465)。

- しかしながら、Swrらはこうした風潮に批判的だった。
- 潮目が変わったのは、1957年にPhilp and Timmsによる「『問題家族』の問題」と題する書籍が出版されたこと。
- この本の中で、「遺伝についての考え方が、社会学や心理学の研究の価値を覆い隠してしまっている」と述べられ、優生学が批判されたことをSWのジャーナルは歓迎した。そしてこれ以降、社会病理学から社会科学へと、流行のトレンドは移行していった(ibid.: 475)。それとともに、Swrの専門性が確立していく。

- SWrが、専門性を確立していく過程には、**優生学との「戦い」があった**のだという筋。
- これに対し、Gibson(2015)は、**SWと優生学の親和性**を指摘する。

- 「SWの職業的発展の推進力の根っこには、堕落と社会改良の言説がある」 (Gibson 2015: 320)。→クイアネス(性的逸脱)と障害(具体化された逸脱)をめぐる専門職の言説は、優生学と関連が深い。
- 優生学は、科学に関心のある専門職者にとっては魅力的な領域。Gibsonは、「多くの心理学者、Swr、教師も優生学に魅了されるだろう。なぜなら、彼らは社会問題の科学的アプローチとされるものを受け入れることで、その社会的地位を高めることができたから」というMcLaren(1990)の言葉を引用している。

- かつての例：1930年代、カナダで政策アドバイザーだった保守的なSwr、Whittonが「児童福祉の問題としての精神障害」という記事を執筆し、その中で優生学的な考えを明確に示している。
- 現在もSWにおける優生学の遺産は、クイアネスや障害などの言説に残存している (ibid. : 321)。たとえば、LGBTの両親の支援の必要性を訴えるときに、彼ら/彼女らの子どもがいかに「普通」で「健康」であるかを強調することなど。

●尊厳の問題に引き寄せてみる。
Welshman論文が示しているのは、貧しい家族を尊重し、優生学に反発するSwrの姿である。一方、Gibson論文から浮かび上がってくるのは、尊厳を守るに値する人とそうでない人がいる、ということを（依然として社会福祉/SWIは）仄めかしているのではないか、ということである。

●文献

- Gibson, M. (2015) 'Intersecting Deviance: Social Work, Difference and the Legacy of Eugenics', *British Journal of Social Work*, 45, pp.313-330.
- Paine, M. (2011) *Humanistic Social Work: Core Principles in Practice*, Palgrave Macmillan.
- Welshman, J. (1999) 'The Social History of Social Work: The Issue of the 'Problem Family', 1940-70' , *British Journal of Social Work*, 29, pp.457-476.